

# へき地小規模校児童と都市部適正規模校児童の 運動習慣・運動有能感・友人関係についての比較： 北海道十勝振興局内の小規模小学校を対象とした調査から

中 島 寿 宏<sup>1</sup>, 高 瀬 淳 也<sup>2</sup>

## Comparison of physical education, exercise and peer-relationship in children between rural small school and urban appropriate size school : A survey of small size elementary schools in Tokachi subprefecture of Hokkaido

Toshihiro Nakajima<sup>1</sup>, Junya Takase<sup>2</sup>

### Abstract

It is thought that rural education contains a lot of problems. There are many previous studies that emphasize disadvantages about immobilization of human relations and difficulty of autonomy of small size schools and small size classes in remote areas. Especially, it has been said that physical education classes with small number of children limit children's opportunities of sports activities and awareness of physical activeness. The purpose of this study was to reveal children's consciousness for physical education classes and exercise habits in small size elementary schools in remote areas. 5th and 6th grade children belonging to forty-one rural small schools in Hokkaido answered to questionnaires about their exercise habits and consciousness for physical activities. In order to investigate the features of remote area, children in small size schools were compared with children in urban areas. These results showed that the children in remote areas have positive attitudes toward physical education classes. Many children in remote areas are participating in extracurricular sports activities compared to children in the urban areas, therefore it can be assumed that there are sufficient opportunities to engage in sports activities in remote areas. Furthermore, children's physical competences and goal orientation in peer relationships were much higher compared to urban children. This result showed that children tend to have higher self-confidence of physical abilities and attitudes to grow up in friends' relationships and indicate to cultivate good human relations and sociability even in small size schools of remote areas.

**key words:** Small size class, Remote area, Small group physical education, Exercise habits

- 
1. 北海道教育大学札幌校  
〒002-8502 北海道札幌市北区あいの里5条3丁目
  2. 帯広大谷短期大学  
〒080-0335 北海道河東郡音更町希望が丘3番地3

著者連絡先 中島 寿宏  
nakajima.toshihiro@s.hokkyodai.ac.jp

1. Hokkaido University of Education Sapporo  
5-jo 3-cyome, Kita Ward, Sapporo, Hokkaido 002-8502
2. Obihiro Otani Junior College  
3,3 Kibougaoka, Otofuke, Kato District, Hokkaido 080-0335

## 1. はじめに

北海道教育委員会(2018)が公表しているデータでは、2018年5月現在において、北海道内には全1,038校の小学校のうち3分の1以上に当たる373校が、学校教育法施行規則第41条(2017)に明記されている適正規模学級数を下回る12学級未満の小規模校であり、へき地指定を受けて、なおかつ適正規模の学級数に満たない小学校は339校であった。また、全校児童数を学級数で割った人数が20名未満となる小学校は北海道全体の約59%にあたる616校、10名未満となる小学校は約33%にあたる347校あることから、北海道内では少人数学級が多く存在すると考えられる。

小規模校・少人数学級については、これまでそのメリットやデメリットについて議論が多くされてきている。国立教育政策研究所(2016)が実施した平成28年度全国学力・学習状況調査の調査結果報告では、へき地の調査結果が全国平均と対比しながら示されている。この報告では、学習時間や通塾頻度などの項目ではへき地小規模校の児童のポイントが若干低い値を示していたものの、全体として学習や生活におけるへき地のデメリットやへき地小規模校の児童が劣っているという状況は確認されていない。その中でも、児童同士の話し合い活動についての項目や、児童と教師とのかわりについての項目では、全国平均に比べてへき地の児童のポイントが高い結果となっていた。中央教育審議会初等中等教育分科会(2008)が作成した資料では、学習面と生活面のどちらにおいても、「児童・生徒一人ひとりに目が届きやすく、きめ細かな指導が行いやすい」ことが小規模の学校におけるメリットとして示されている。これらのことから、小規模校・少人数学級ではデメリット以外のポジティブな面があることが確認できる。

しかしながら、全国へき地教育研究連盟(1999)の報告によると、小規模学校では狭い地域で保育所から小学校・中学校まで同じメンバーで学校や家庭での生活から人間関係が固定化、序列化されてしまうことや、少人数のために教師の手が行き届きすぎ、児童生徒の自主性や主体性が育ちにくかったり、活動が停滞しやすかったりするといった点がデメリットとして挙げられている。全国へき地教育研究連盟は、さらに相互交流の相手が限定されるために、生活経験や学習経験が豊かにならず発展性に乏しい傾向を持つこと、妥協的になりやすく厳しい態度の育成や活発な討議が展開しないことが多いと示しており、へき地少人数学級の授業について多くのデメリットの存在が指摘されている。近年では、中央教育審議会初等中等教育分科会(2015)が、「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引(案)」を公表した。その中では小規模校の様々なメリットを認めつつも、児童生徒が集団の中で、多様な考えに触れ、認め合い、協力し合い、切磋琢磨することを通じて一人一人

の資質や能力を伸ばしていくためには、一定規模の児童生徒集団が確保されていることが望ましいとして、へき地でのデメリットを指摘している。

各教科指導においては、へき地小規模校では、特に体育授業の構成に難しさがあると考えられる。体育では小集団やチームを形成してのゲーム・試合の実施や、互いの運動・動作を観察しあったり評価しあったりする場面が多く、学級の仲間との相互関係の中で活動することが可能となる適度な集団の大きさが要求される。現行の小学校学習指導要領(文部科学省, 2008)における体育の目標では「だれとでも仲よく」する態度を育てることや、「協力、公正などの態度を育てる」ということが明記されており、さらに平成29年に公示された新学習指導要領(文部科学省, 2017)においては「考えたことを他者に伝える力を養う」とあることから、体育では協同・協力して課題に取り組む場面設定が求められる。先行研究では、上手な仲間のパフォーマンスやデモンストレーションは、より具体的な運動内容を提示することにもなるとの指摘(森, 2002)や、体育授業における協同学習の成果として、情意社会領域の学習の促進だけでなく、認知領域や運動領域にも肯定的な影響があるという指摘(栗田, 2015)からも、仲間たちと協同・協力しながら課題に取り組む協同学習の形態や機能というものが、体育の目標を実現する上では重要であると言える。しかし、全校児童数・学級内児童数が少ない少人数で実施されるへき地小規模校での体育授業では、集団をベースとした協同学習の機会を設定しづらいのが実態である。

へき地小規模小学校の体育授業現場では、少人数でのデメリットを解消するために1~6年生の全校児童が同時に行う全校体育や、他校と協力して合同で実施する集合体育という試みがなされてきた(全国へき地教育研究連盟, 2000)。ところが、身体的にも心理的にも発達段階の異なる1年生から6年生までの児童が合同で授業参加する全校体育や集合体育では、上級生にとっては自分が思い切り活動する場面が制限されることや、下級生にとっては上級生との意見交流が難しく聞き役となる場面が多くなりがちとなることが考えられる。また、集合体育では複数の学校が日程調整をしたり実施場所への移動をしたりする必要があるため、日常的なカリキュラムの一部として取り入れることが難しく、それまでの授業の流れとの整合性を持たせることも困難であり、効果的な体育授業とはなっていないと指摘されている(全国へき地教育研究連盟, 1998)。このように、へき地小規模校での体育授業には、適正規模の学校では存在しない特殊な課題が多くあると一般的には捉えられているのが実情である。

これまでの議論の中で取り上げられているへき地小規模校の実際的なメリット・デメリットや、少人数学級での体育授業における優位性や課題については限定的な事例に基づいた報告が主であり、多くのへき地小規模校を

対象とした運動・体育への志向性や友人関係についての実態調査や統計的な分析が行われておらず、へき地小規模校の傾向について客観的な検討がされてきたとは言えない。へき地の子どもたちの運動量については、歩数についてへき地と都市部との比較についての報告（清水ほか、2015）はあるが、運動・スポーツの習慣については実態が明らかになっていない。また、幼児期・児童期に運動での成功体験によって形成される「運動有能感（岡沢ほか、1996）」は、運動が好きで活動的になるだけでなく日常の行動においても自信を持ち積極的に行動するようになる（杉原、2008）と言われているが、へき地小規模校での運動有能感の実態についての報告は見当たらない。このように、へき地小規模校の学校生活実態や体育・運動実態に関するメリット・デメリットについて客観的データをもとに、調査・分析することが必要であると考えられる。

そこで、本研究ではへき地小規模小学校と都市部適正規模小学校の児童を対象として、運動習慣、運動・体育の好き嫌い、運動有能感、友人関係についての多角的な比較・検証を行うことで、それぞれの地域での運動や体育に関わる実態を明らかにし、学校規模によるメリット・デメリットについて再検討することを目的とした。

## 2. 研究の方法

### 1) 対象校・対象学級・対象児童

調査の対象児童は、2014年度において北海道十勝総合振興局内のへき地指定を受けている小規模小学校である全41校の児童と、札幌市内適正規模小学校2校（各学年3学級の適正規模小学校）に在籍する児童であった<sup>注1)</sup>。北海道十勝総合振興局は、帯広市を中心とした19市町村からなる振興局である。北海道の振興局では最も広い面積（10,831.24km）を有しており、東京都、神奈川県、千葉県を合わせた面積（9,764.34km）よりも広い。最近では、札幌市を除く北海道全体の人口減少問題と同様に、十勝総合振興局内では子どもの数が減少しており、小規模校・少人数学級の増加が問題化してきている。北海道へき地・複式教育連盟の報告<sup>注2)</sup>をもとに地域ごとの小中学校の加盟校数を確認すると、平成24年度の時点では十勝地方が44校と北海道内で最多であり、へき地・複式教育への問題意識や関心が高い地域であると言える。同様に、十勝地方のへき地教員数が最も多く857名であり、次に多い根室地方の518名を大きく上回っていることから、へき地・複式教育へのかかわりが強いことがわかる。これらのことから、本研究では調査の対象を十勝総合振興局内のすべてのへき地小規模小学校とした。また、都市部の対象校である2校については、対象校の校長および複数の教諭、市内の他中学校の複数の校長らが、学力、体力、学習習慣、および生活習慣について札幌市内で平均的であるという判断を行い、それらの意見を元に選定

を行なった。

対象学級はどちらも高学年学級（5年生学級、6年生学級、5・6年生複式学級）である。対象となったすべての小学校に質問紙を配布し、5・6年生の高学年児童からの回答を求めた。回収率はへき地小規模小学校が87.8%（41校中36校）、札幌市内小学校が100%（2校中2校）であった。回答を得られたそれぞれの児童数は、へき地小規模校では5年生103名（男子49名、女子54名）と6年生106名（男子59名、女子47名）の209名であった。札幌市内適正規模校では、5年生126名（男子63名、女子63名）と6年生140名（男子57名、女子83名）266名であった<sup>注2)</sup>。

### 2) 調査の内容

児童への質問紙調査の項目を表1に示した。学年と性別に加えて、運動系少年団・クラブチームへの所属・非所属、運動・体育への意識に関する質問3項目、運動・生活実態に関する質問2項目、運動有能感に関する質問12項目、友人関係の捉え方に関する質問25項目であった。

運動有能感については、岡沢ほか（1996）が作成した「運動有能感測定尺度」を使用した。「運動有能感測定尺度」は、12項目の質問からなる測定尺度で、自己の運動能力、運動技能に対する肯定的認知に関する「身体的有能さの認知」、自己の努力や練習によって運動をどの程度コントロールできると認知しているかに関する「統制感」、そして運動場面で教師や仲間から自分が受け入れられているという認知に関する「受容感」の3つの因子からなる。3因子それぞれに関わる項目の得点を合計して、各因子としての得点とした。岡沢ほかの報告では、運動有能感が高ければ体育・スポーツでの内発的動機づけも高く、「身体的有能さの認知」「統制感」「受容感」のそれぞれが内発的動機づけにポジティブな影響を及ぼしているとしている。また、運動有能感は体力の水準と強く関連しており、特に中・高学年では運動有能感を高めることが身体能力の向上に大きくかかわっているという報告（武田、2005；武田、2006）もある。本調査では、都市部とへき地での体育や運動への意識の差を調査することが目的であり、子どもたちの運動有能感の抱き方の違いについて着目して、この指標を用いることとした。

友人関係の意識については、黒田ほか（2001）が作成した「友人関係場面における対人目標志向性尺度」を用いて評価した。へき地小規模の学校では、友人関係が限定されていて対人的な経験が乏しいと考えられている。地域による対人関係の捉え方の違いについて検証するためにこの尺度を用いることとした。「友人関係場面における対人目標志向性尺度」は、自分とは違った性格や考えを持つ友人と積極的に関わってみるという経験を通して自己を成長させることを目指す「経験・成長目標」、性格について良い評価を得ようとする「評価-接近目標」、性格について悪い評価を避けようとする「評価-

表1 児童への質問項目

|           | 質問内容                            | 回答形式       |                |                |                |          |
|-----------|---------------------------------|------------|----------------|----------------|----------------|----------|
| 所属・非所属    | 学校以外で少年団やスポーツクラブに通っていますか？       | はい/いいえ     |                |                |                |          |
| 運動・体育への意識 | 体育は好きですか？<br>(5件法)              | 1. きれい     | 2. あまり好きではない   | 3. どちらとも言えない   | 4. まあまあ好き      | 5. 好き    |
|           | 運動・スポーツは好きですか？<br>(5件法)         | 1. きれい     | 2. あまり好きではない   | 3. どちらとも言えない   | 4. まあまあ好き      | 5. 好き    |
|           | 運動・スポーツの得意・不得意ですか？<br>(5件法)     | 1. とくいではない | 2. あまりとくいではない  | 3. どちらとも言えない   | 4. まあまあとくい     | 5. とくい   |
|           | 学校が終わった後や休みの日によく遊ぶ友達は何人いますか？    | (          |                | )              | 人              |          |
| 運動・生活実態   | 1週間で何日くらい運動をしますか？<br>(体育をのぞく)   | (          |                | )              | 日              |          |
|           | 1日にどのくらいテレビ・ビデオ・DVDなどをみますか？     | 1. ほとんどみない | 2. 15分～30分のあいだ | 3. 30分～1時間のあいだ | 4. 1時間～2時間のあいだ | 5. 2時間以上 |
|           | 1日にどのくらいゲーム・スマートフォン・携帯電話を使いますか？ | 1. ほとんどない  | 2. 15分～30分のあいだ | 3. 30分～1時間のあいだ | 4. 1時間～2時間のあいだ | 5. 2時間以上 |

回避目標」という、3つの因子からなる指標である。

### 3) 分析方法

児童からの回答については、へき地小規模校の児童と都市部適正規模校の児童の回答を男女ごとに集計し、統計的手法を用いて比較・分析を行った。運動・生活実態に関する質問の中の「運動系のクラブ・少年団への所属・非所属」の割合の比較については $\chi^2$ 検定、その他の項目についてはKolmogorov-Smirnov Testによる正規性の確認を行ったのち、正規性が確認された場合はStudentのt-test、正規性が確認されなかった場合はMann-WhitneyのU-testを用いて差の検定を行った。本調査では女子の「友人関係場面における対人目標志向性尺度」の「評価—回避目標」のみで正規性が確認されたためt-testを行い、その他の項目での比較にはMann-WhitneyのU-testを行なった。それぞれの有意水準は5%未満として検定を実施した。

### 3. 結果

#### 1) 少年団・スポーツクラブへの所属・非所属率

へき地小規模校の児童と都市部適正規模校の児童での、運動系の少年団・スポーツクラブへの所属・非所属の割合を $\chi^2$ 検定により比較した結果を表2に示した。

男子では $\chi^2$ 検定の結果、有意な差が認められた( $\chi^2=15.857$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ )。この結果と残差を見ると、へき地男子児童は都市部男子児童よりも運動系の少年団・スポーツクラブへの所属率が高いと解釈することができる。女子においても、男子と同様に有意差が認められた( $\chi^2=36.462$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ )ことから、へき地女子児童も都市部女子児童よりも運動系の少年団・スポーツクラブへ所属している率が高いと言える。特に女子では、都市部適正規模校の児童の所属率が26.7%であるのに対し、へき地小規模校の児童の所属率が65.3%

表2 運動系の少年団・スポーツクラブへの所属・非所属のクロス集計と $\chi^2$ 検定結果

|     | へき地小規模<br>男子 | 都市部適正規模学級<br>男子 | $\chi^2$ 値 | p値     |
|-----|--------------|-----------------|------------|--------|
| 所属  | 77.8%        | 52.5%           | 15.857     | 0.000* |
| 非所属 | 22.2%        | 47.5%           |            |        |
| 度数  | 108          | 120             |            |        |
|     | へき地小規模<br>女子 | 都市部適正規模学級<br>女子 | $\chi^2$ 値 | p値     |
| 所属  | 65.3%        | 26.7%           | 36.462     | 0.000* |
| 非所属 | 34.7%        | 73.3%           |            |        |
| 度数  | 101          | 146             |            |        |

\*: 有意差あり

約2.4倍も高くなっていた。このことから、へき地においては学校外でスポーツ・運動を行なっている傾向にあると考えられる。

## 2) 運動・体育への意識と運動・生活の実態

へき地小規模校の児童と都市部適正規模校の児童での体育・運動の好き嫌いや得意不得意、および運動・生活実態について比較した結果を男子は表3、女子は表4に示した。

男子では、へき地小規模校の児童が都市部適正規模校の児童に比べて「体育が好き」「運動スポーツが好き」と答える傾向が有意に高くなっていた。これらのことから、へき地小規模小学校では都市部と比較して運動・スポーツに対してポジティブな意識であることが示唆された。運動・生活実態については、「よく遊ぶ友達の数」がへき地小規模校の児童と都市部適正規模校の児童で有意差が認められなかった。少年団・スポーツクラブへの所属率を考慮すると、へき地小規模小学校では校内や学

級内での児童数が少ない状態であるが、放課後の少年団・スポーツクラブ等における友人たちとの交流機会を有していることが推察される。

女子では、男子の傾向とは異なり、「体育の好き嫌い」、「運動・スポーツの好き嫌い」では地域間での有意差が見られなかった。「運動・スポーツの得意・不得意」では、へき地小規模校の児童が有意に高い値を示した。また、運動・生活の実態では、「よく遊ぶ友達の数」では、へき地小規模校の児童が都市部適正規模校の児童よりも有意に低い値であり、友人関係は都市部との比較では限定される傾向にあることが明らかとなった。「運動日数」では、へき地小規模校の児童の値が有意に高い結果となっていた。

## 3) 運動有能感の地域差

へき地小規模校の児童と都市部適正規模校の児童の運動有能感の比較の結果を、男子は表5、女子は表6に示した。

表3 運動・体育への意識に関する質問と運動・生活実態に関する質問 (男子)

|           |                                | へき地小規模校 男子 |      |   |      | 都市部適正規模校 男子 |      |   |      | Mann-WhitneyのU | p値     |
|-----------|--------------------------------|------------|------|---|------|-------------|------|---|------|----------------|--------|
|           |                                | 度数         | Mean | ± | SD   | 度数          | Mean | ± | SD   |                |        |
| 運動・体育への意識 | 体育の好き嫌い (5件法)                  | 108        | 4.70 | ± | 0.86 | 120         | 4.52 | ± | 0.99 | 5775.5         | 0.045* |
|           | 運動・スポーツの好き・嫌い (5件法)            | 108        | 4.73 | ± | 0.70 | 120         | 4.48 | ± | 0.99 | 5691.5         | 0.031* |
|           | 運動・スポーツの得意・不得意 (5件法)           | 108        | 4.06 | ± | 1.08 | 120         | 3.63 | ± | 1.41 | 5553.0         | 0.049* |
| 運動・生活実態   | よく遊ぶ友達の数 (単位:人)                | 108        | 3.60 | ± | 2.82 | 120         | 4.18 | ± | 2.54 | 5787.0         | 0.160  |
|           | 1週間のうちの体育を除く運動日数 (単位:日)        | 108        | 4.29 | ± | 2.08 | 120         | 3.93 | ± | 2.26 | 5942.5         | 0.275  |
|           | 1日のテレビ・ビデオ・DVDなどの視聴時間 (5件法)    | 108        | 3.85 | ± | 1.23 | 120         | 3.85 | ± | 1.23 | 6472.5         | 0.990  |
|           | 1日のゲーム・スマートフォン・携帯電話の使用時間 (5件法) | 108        | 3.23 | ± | 1.35 | 120         | 3.78 | ± | 1.16 | 5003.0         | 0.002* |

\*: 有意差あり

表4 運動・体育への意識に関する質問と運動・生活実態に関する質問 (女子)

|           |                                | へき地小規模校 女子 |      |   |      | 都市部適正規模校 女子 |      |   |      | Mann-WhitneyのU | p値     |
|-----------|--------------------------------|------------|------|---|------|-------------|------|---|------|----------------|--------|
|           |                                | 度数         | Mean | ± | SD   | 度数          | Mean | ± | SD   |                |        |
| 運動・体育への意識 | 体育の好き嫌い (5件法)                  | 101        | 3.95 | ± | 1.31 | 146         | 3.83 | ± | 1.40 | 7007.0         | 0.568  |
|           | 運動・スポーツの好き・嫌い (5件法)            | 101        | 4.15 | ± | 1.06 | 146         | 3.92 | ± | 1.24 | 6772.5         | 0.246  |
|           | 運動・スポーツの得意・不得意 (5件法)           | 101        | 3.39 | ± | 1.33 | 146         | 2.99 | ± | 1.40 | 6203.0         | 0.030* |
| 運動・生活実態   | よく遊ぶ友達の数 (単位:人)                | 101        | 3.17 | ± | 3.13 | 146         | 3.71 | ± | 2.67 | 6286.0         | 0.047* |
|           | 1週間のうちの体育を除く運動日数 (単位:日)        | 101        | 3.02 | ± | 1.90 | 146         | 2.47 | ± | 1.98 | 6068.5         | 0.016* |
|           | 1日のテレビ・ビデオ・DVDなどの視聴時間 (5件法)    | 101        | 3.60 | ± | 1.23 | 146         | 4.01 | ± | 1.08 | 5984.5         | 0.009* |
|           | 1日のゲーム・スマートフォン・携帯電話の使用時間 (5件法) | 101        | 2.69 | ± | 1.36 | 146         | 3.36 | ± | 1.34 | 5363.5         | 0.001* |

\*: 有意差あり

表5 運動有能感の比較 (男子)

|           | へき地小規模校 男子 |       |   |      | 都市部適正規模校 男子 |       |   |      | Mann-WhitneyのU | p値     |
|-----------|------------|-------|---|------|-------------|-------|---|------|----------------|--------|
|           | 度数         | Mean  | ± | SD   | 度数          | Mean  | ± | SD   |                |        |
| 身体的有能さの認知 | 108        | 14.45 | ± | 4.11 | 120         | 12.82 | ± | 4.93 | 5264.5         | 0.014* |
| 統制感       | 108        | 17.07 | ± | 3.34 | 120         | 16.13 | ± | 3.79 | 5426.5         | 0.032* |
| 受容感       | 108        | 16.94 | ± | 3.18 | 120         | 14.13 | ± | 4.44 | 3944.5         | 0.001* |

\* : 有意差あり

表6 運動有能感の比較 (女子)

|           | へき地小規模校 女子 |       |   |      | 都市部適正規模校 女子 |       |   |      | Mann-WhitneyのU | p値     |
|-----------|------------|-------|---|------|-------------|-------|---|------|----------------|--------|
|           | 度数         | Mean  | ± | SD   | 度数          | Mean  | ± | SD   |                |        |
| 身体的有能さの認知 | 101        | 12.47 | ± | 4.72 | 146         | 10.23 | ± | 4.48 | 5354.5         | 0.001* |
| 統制感       | 101        | 16.08 | ± | 4.07 | 146         | 14.66 | ± | 4.07 | 5847.5         | 0.005* |
| 受容感       | 101        | 15.96 | ± | 3.66 | 146         | 14.56 | ± | 3.89 | 5707.0         | 0.002* |

\* : 有意差あり

男子では「身体的有能さの認知」「統制感」「受容感」の3要因すべてで、へき地小規模校の児童の値が有意に高い結果となった。また、女子も同様に3要因すべてにおいて、へき地小規模校の児童の値が有意に高い結果となった。このことから、へき地小規模校の児童が都市部適正規模校の児童よりも運動有能感を有していると考えられる。

#### 4) 対人関係の捉え方の地域差

へき地小規模校の児童と都市部適正規模校の児童の間での友人関係場面における対人志向性の比較結果を、男子は表7、女子は表8に示した。

男子では、対人関係の中で自己を成長させようとする意識である「経験・成長目標」の値で、へき地小規模校の児童が都市部適正規模校の児童よりも高い値を示していた。他者からの評価についての「評価-回避目標」「評価-接近目標」では有意差が見られなかった。

女子では、男子と同様に「経験・成長目標」の値がへ

き地小規模校の児童で有意に高くなっていた。また、他者から良く見られたいという「評価-接近目標」についても、へき地小規模校の児童が都市部適正規模校の児童よりも有意に高い結果となっていた。

#### 4. 考 察

##### 1) へき地小規模校児童の少年団・スポーツクラブと運動・体育への意識

へき地の小学生を対象とした体育への意識調査(辻本ほか, 1971)では、学校の立地条件の不良や設置用具の不備不足、児童数の狭少が種目の興味に影響しており、地域的特性が児童たちの遊びの貧困につながっていると指摘している。中学生を対象とした体育・スポーツへの意識調査(辻本ほか, 1972)では、へき地では施設・用具が不足しがちであるにもかかわらず、年齢的に運動欲求が高いと報告している。しかし、調査対象となったへき地の学校では、生徒たちの好きな運動種目が球技に

表5 友人関係場面における対人目標志向性の比較 (男子)

|         | へき地小規模校 男子 |       |   |      | 都市部適正規模校 男子 |       |   |      | Mann-WhitneyのU | p値     |
|---------|------------|-------|---|------|-------------|-------|---|------|----------------|--------|
|         | 度数         | Mean  | ± | SD   | 度数          | Mean  | ± | SD   |                |        |
| 経験・成長目標 | 108        | 32.58 | ± | 9.14 | 120         | 28.67 | ± | 7.76 | 4912.5         | 0.002* |
| 評価-回避目標 | 108        | 19.89 | ± | 6.32 | 120         | 20.94 | ± | 6.13 | 5919.0         | 0.259  |
| 評価-接近目標 | 108        | 17.55 | ± | 5.54 | 120         | 16.38 | ± | 6.06 | 5661.5         | 0.099  |

\* : 有意差あり

表6 友人関係場面における対人目標志向性の比較 (女子)

|         | へき地小規模校 女子 |       |   |       | 都市部適正規模校 女子 |       |   |      | Mann-WhitneyのU<br>(評価-回避目標のみt値) | p値     |
|---------|------------|-------|---|-------|-------------|-------|---|------|---------------------------------|--------|
|         | 度数         | Mean  | ± | SD    | 度数          | Mean  | ± | SD   |                                 |        |
| 経験・成長目標 | 101        | 32.31 | ± | 10.50 | 146         | 29.47 | ± | 6.41 | 6107.000                        | 0.022* |
| 評価-回避目標 | 101        | 19.10 | ± | 5.77  | 146         | 17.71 | ± | 5.91 | 1.839                           | 0.067  |
| 評価-接近目標 | 101        | 18.05 | ± | 4.89  | 146         | 15.74 | ± | 5.68 | 5613.0                          | 0.001* |

\* : 有意差あり

偏っているにも関わらず球技の運動機会が少ないことを指摘している。また、調査対象校では筋力や身長・体重が全国平均よりも低かったことから、運動機会の少なさをその原因の一つと報告している。本調査の結果では、十勝振興局内のへき地に居住する子どもたちは札幌市内の子どもたちと比較して、男女共に運動系の少年団やスポーツクラブに加入している割合が高く、女子では運動頻度も高いことから、運動にかかわる機会や時間についてのデメリットやハンディは確認できなかった。特に、十勝振興局ではスケートが盛んな地域であり、平成19年度の第30回全十勝スポーツ少年団スケート交歓大会では、50団体もの参加があったことが報告されている（幕別町体育連盟，online）ことから、冬季スポーツに親しむ機会も多くある地域であると考えられる。

文部科学省（2000）はスポーツ振興基本計画を告示し、国民の誰もが身近にスポーツに親しむことのできる生涯スポーツ社会の実現に向け、日常的にスポーツをする場の整備を推進するなど、地域のスポーツ環境の整備を推進することを目的として、総合型地域スポーツクラブの育成支援を進めてきている。この計画の中では、2001年から2011年までの10年間で、全国の各市区町村において少なくとも一つは総合型地域スポーツクラブを育成することが明文化されている。日本体育協会（2016）のWebサイトを確認すると、北海道においても2010年前後から総合型地域スポーツクラブが多く設立されていることがわかる。これらの背景もあり、近年では北海道各地で子どもたちが日常的にスポーツや運動に触れることのできる機会が増えてきており、へき地であってもスポーツの実践が一昔前よりも身近になっている。つまり、これまで明らかとなっていなかったへき地の子どもたちのスポーツ活動へのアプローチについては、今回の調査結果では運動機会が都市部と比較して決して少なくないことが明らかとなった。さらに、都市部普通学級高学年児童と比較して、十勝振興局内におけるへき地少人数学級の高学年男子では体育授業や運動・スポーツを好意的に捉えていることも明らかとなった。その他にも、女子では運動が得意と答える児童が多いこと、男女ともに運動有能感が高いこと、運動・スポーツ系の少年団・スポーツクラブへの所属率が高いことなど、運動・スポーツに触れる機会が多く確保されていることが推察できる。

## 2) へき地小規模校における児童の人間関係とコミュニケーション

へき地小規模校の児童たちの人間関係やコミュニケーションについて、全国へき地教育研究連盟（2000）が指摘する発展性に乏しい傾向や、活発な議論が展開しないというへき地小規模校の問題点が前提となって、その問題解決の方法がこれまでのへき地研究の中では議論されてきた。ところが、へき地小規模校のデメリットの具体的内容や存在については客観的データを基にした検証が

されていなかった。過去の報告ではへき地に暮らす子どもたちのコミュニケーションはネガティブな面が強調されている。溝口（1959, 1966）は、へき地の限定された人間関係の中での生活によって生活の暗い重圧が、子どもの個性を一つ一つ押しつぶしていき、ついには等質的な人間が作り上げられていくと示しており、へき地でのデメリットが半世紀前にはすでに認識されていることがわかる。また、北海道複式教育研究連盟（1975）はへき地小規模校の児童に関わる劣性として、言語環境の乏しさによる思考、表現力の不足を挙げている。さらに、へき地小規模校の児童は幼少年期から固定化された仲間関係で生活してきていることから、多様な仲間たちとのかわりを通じた仲間集団の構築といった社会性の獲得という子どもの成長の可能性を大きく狭めることにつながっているという指摘もある（岸ほか, 2014）。このため、大きな集団に入った際は、自分の思いが伝えられなかったり、自ら輪に溶け込むことができなかつたりなど、へき地小規模校出身の子どもたちの人間関係作りでの消極的な傾向となって現れてしまうという懸念が持たれてきた。

今回の調査結果では、十勝振興局内におけるへき地小規模校の児童は札幌市内適正規模校の児童と比較して、人間関係を肯定的にとらえている傾向が明らかとなった。特に、へき地小規模校の児童の男女とも、「自分とは違った性格や考えを持つ友人と積極的に関わってみる」意欲を持っており、自分を高めるために友だちとかわることが大切だと考えている傾向が見られ、これまでのへき地のデメリットを指摘する多くの報告とは異なる結果となった。

小規模校のメリットに目を向けると、少人数の学級や授業について、個々の子どものつまずきを把握できること、ノート指導や家庭学習指導においても、密接な連携指導を進めることができること、少人数では、教師と子どもの関係および子ども同士の関係では、親密な関係があり、教育活動の条件としては非常にいい関係を持っていることなどが指摘されている（玉井, 2012）ことから、少人数であることが人間関係でのメリットとして十分に機能すると考えられる。特に体育授業では、集団ゲームには人数的な課題があるものの、小規模・少人数学級における体育授業は子どもと教師が深くかわり合うことができる（盛島, 2003）ことから、児童と教師の信頼関係が築きやすい環境であると考えられる。

最近では、体育授業でのへき地小規模校の児童数の少なさというデメリット面の解消を考慮し、コミュニケーションや意見交流の場面を広げるような体育実践についての取組が報告されるようになってきている（高瀬ほか, 2014；高橋ほか, 2013）。これらの報告例のように、少人数での子ども同士の人間関係の中でも、小規模校の良さやICTなどによるコミュニケーション機会の確保などが可能であると考えられる。これらのことから、へ

き地小規模校における体育授業や社会性の獲得については、デメリットのみに焦点を当てるだけではなく、メリットについての議論も合わせて進められる必要があるだろう。

## 5. まとめ

本研究では、これまで議論されてきたへき地小規模校特有のメリットとデメリットの実態について、へき地小規模校が多く存在する十勝振興局内における小規模小学校の児童を対象とした大規模な調査を実施した。特に、体育授業、少年団・スポーツクラブ等での活動、運動有能感、対人関係に着目し、札幌市内適正規模小学校に在籍する児童との比較からへき地小規模校の実態を明らかにする事を試みた。結果として、今回の調査で対象となった十勝振興局内にあるへき地小規模小学校では、これまで語られてきたへき地のデメリットについて、その多くは実態として確認する事ができなかった。逆に、へき地小規模校の児童では、男女で項目に違いがみられたものの、学習活動への意欲的態度、体育や運動に対する積極性、対人関係における捉え方などについてポジティブな傾向が見られていた。これらのことから、へき地小規模校に対して、これまで一般的に考えられてきたイメージを転換し、現代のへき地の状態についてメリットの含めた客観的な視点から議論していくことが必要であると考えられる。

本研究では調査の範囲を北海道十勝地方のへき地小規模小学校を対象としたが、地域・地方による特徴が異なると考えられるため、今後は十勝以外のさらに範囲を広げた地域・地方での調査や、北海道以外の地域・地方との比較によるさらなる検証が求められるだろう。また、へき地小規模校の子どもたちが卒業後に適正規模・大規模の学校に進学した場合、新たな環境にどのように適応・対応しているのかについて、男女差を考慮した縦断的な追跡調査を行うことで、へき地小規模校の特性についてさらに明らかにしていくことが今後の課題である。

## 注

注1) 札幌市が発表している教育データ集(2014)では、平成25年度5月1日現在での札幌市内小学校数は204校、総学級数は3,248であった。札幌市内小学校では平均約15.9学級となり、学年平均2.7学級となっている。このことから、本研究の札幌市内の調査対象校として学年3学級の適正規模小学校を選択した。

注2) これまで小学生の運動有能感にかかわる調査の対象人数については、岡沢ほか(1996)の報告では小学生505名、中山ほか(2012)の報告では小学生457名、上家ほか(2014)の報告では小学生474

名であった。本研究では、これらの先行研究に倣い、対象となる小学生を500名程度と設定し、結果として475名が対象となった。都市部の対象校である2校については、対象校の校長および複数の教諭および市内の他中学校の複数の校長らが、学力、体力、学習習慣、および生活習慣について札幌市内で平均的であるという判断を行い、それらの意見を元に選定を行なった。

## 謝 辞

本研究はJSPS科研費JP17K04820の助成を受けたものです。

## 文 献

- 中央教育審議会初等中等教育分科会(2008)学校規模の適正化及び少子化に対応した学校教育の充実策に関する実態調査について。中央教育審議会初等中等教育分科会資料2-3:p18. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/gijiroku/\\_icsFiles/afieldfile/2015/01/19/1354538\\_6.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2015/01/19/1354538_6.pdf), (参照日2019年6月14日)。
- 中央教育審議会初等中等教育分科会(2015)小・中学校の設置運営の在り方等に関する作業部会第8回資料:学校規模によるメリット・デメリット(例)。 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/038/siryu/08120806/001.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/038/siryu/08120806/001.htm), (参照日2019年6月18日)。
- 北海道教育委員会(2018)北海道教育委員会北海道学校一覧。 <http://www.dokyo.pref.hokkaido.lg.jp/hk/ksk/chosa/gakkou-i/2018gakkou-i.htm>, (参照日2019年6月15日)。
- 北海道複式教育研究連盟編(1975)双書へき地複式教育の創造1 複式教育の実践理論。明治図書。
- 北海道複式教育連盟(1978)双書へき地複式教育の創造4. 小規模学校の教育方法—その独自性を生かして。明治図書出版。
- 上家卓・中道莉央・神林勲・石澤伸弘・森田憲輝・奥田知靖・高橋正年・山形昇平・岩田悟・朝倉潤・溝口仁志・植山聡・秋月茜・福岡亮佑・松野修造・中島寿宏・志手典之・新開谷央(2014)小学生における体育授業への苦手意識に関する研究:運動有能感に着目して。北海道教育大学紀要教育科学編, 64(2): 101-109。
- 岸俊行・田中志敬・吉田祥造(2014)小規模校における多様な人間関係構築のためのネット会議システムを用いた学校連携プロジェクトの実践と問題点。福井大学教育実践研究, 39: 43-48。
- 国立教育政策研究所(2016)平成28年度全国学力・学

- 習状況調査：調査結果資料【全国版／小学校】。  
<http://www.nier.go.jp/16chousakekkahoukoku/factsheet/16primary/>, (参照日2017年5月10日)。
- 栗田昇平 (2015) 協同学習モデルの体育授業への適用過程とその成果. 体育科教育学研究, 31 (2) : 49-55.
- 黒田祐二・桜井茂男 (2001) 中学生の友人関係場面における目標志向性と抑うつとの関係. 教育心理学研究, 49 : 129-136.
- 幕別町体育連盟. 「幕体連」～50年のあゆみ～2008年デジタル版作成：記念誌：スケート協会. <http://www.maku-tairen.sakura.ne.jp/50skate-top.html>, (参照日2019年6月17日)。
- 溝口謙三 (1959) 日本教育社会学の現状と課題：へき地教育. 教育社会学研究, 14 : 106-115.
- 溝口謙三 (1966) へき地のこども. 東洋館出版社.
- 文部科学省 (2000) スポーツ振興基本計画. [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/plan/06031014.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/plan/06031014.htm), (参照日2019年6月17日)。
- 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領. 東京書籍.
- 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領. 東洋館出版社.
- 森恭 (2002) 学習効果を高める学習集団の構成 (市村宗一ら編) 体育授業の心理学. 大修館書店.
- 盛島寛 (2003) みんなが、みんなでうまくなるマット運動. 体育科教育, 51 (3) : 22-25.
- 中山綾・松坂晃・吉野聡 (2012) 小学生の運動有能感と体力・運動能力および運動スキルとの関係. 茨城大学教育実践研究, 31 : 244-262.
- 日本体育協会 (2016) 総合型地域スポーツクラブ. <http://www.japan-sports.or.jp/local/tabid/67/Default.aspx>, (参照日2019年6月15日)。
- 岡沢祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎 (1996) 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究. スポーツ教育学研究, 16 (2) : 145-155.
- 札幌市 (2014) 教育データ集2014：市立学校・学級数及び児童・生徒・園児数. <http://www.city.sapporo.jp/kyoiku/top/data/data2014.html>, (参照日：2017年5月20日)。
- 清水将軍・清水茂幸・栗林徹・鎌田安久・澤村省逸・上濱龍也・浜上洋平 (2015) へき地・小規模小学校における子どもの体力と生活運動量の関係—体づくり運動を活性化させる教育活動の基礎的検討—. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 14 : 191-199.
- 杉原隆 (2008) 運動指導の心理学：運動学習とモチベーションからの接近. 大修館書店.
- 高橋正年・木本理可・中道莉央・上家卓・神林勲 (2013) へき地小規模中学校におけるマット運動全校一斉授業の試み—異学年の学び合いによる効果に着目して—. 北海道教育大学紀要. 教育科学編, 63 (2) : 49-56.
- 高瀬淳也・中島寿宏 (2014) へき地小規模小学校におけるICTを活用した体育授業の実践—交流の広がりを目指した授業事例から—. 教材学研究, 25 : 231-238.
- 武田正司 (2005) 児童における体力と運動有能感との関係. 盛岡大学紀要, 22 : 41-47.
- 武田正司 (2006) 児童における体力と運動有能感との関係：第2報. 盛岡大学紀要, 23 : 67-74.
- 玉井康之 (2012) へき地小規模校における少人数・複式授業運営の基本的観点. へき地教育研究, (67) : 15-20.
- 辻本勇・竹村昭・岡本重夫 (1971) へき地における体育の現状と問題点—奈良県吉野郡大塔村の小学校について—. 奈良教育大学教育研究所紀要, 7 : 241-258.
- 辻本勇・竹村昭・岡本重夫 (1972) へき地における体育・スポーツの現状と課題—奈良県吉野郡大塔村について—. 奈良教育大学教育研究所紀要, 8 : 147-160.
- 全国へき地教育研究連盟編 (1976) 明るい未来を築く日本のへき地教育シリーズ第1集へき地学校の実践課題と指導. 全国へき地教育研究連盟.
- 全国へき地教育研究連盟 (1998) 学習指導方法の工夫・改善 21世紀を拓く教育シリーズI. 全国へき地教育研究連盟.
- 全国へき地教育研究連盟 (1999) 効率的な学習指導と学校・学級経営～へき地・小規模・複式学級を有する学校の実践的事例～ 21世紀を拓く教育シリーズII. 全国へき地教育研究連盟.
- 全国へき地教育研究連盟 (2000) へき地・複式・小規模学校Q&A—新学習指導要領に添う新しい研究推進のために— 21世紀を拓く教育シリーズIII. 全国へき地教育研究連盟.

〔平成31年4月8日 受付〕  
〔令和元年9月6日 受理〕